

熱処理赤血球法脾シンチグラフィーによる選択的描出を試み、その診断的有用性を検討した。right isomerism 2 例, left isomerism 4 例の計 6 例を対象とした。脾シンチグラフィーはテクネシウム 99m で標識した患者自己赤血球を熱処理したのち 1~3 mCi を静注しガンカメラを用いて撮像し一部の例には SPECT を実施、断層像を得た。5 例でさらに X 線 CT を行い脾の所見を比較した。結果は、right isomerism 2 例では脾の描出はなく無脾と診断した。left isomerism 4 例では脾は選択的に描出されたが、いずれも形態の異常を指摘することができた。このうち 1 例は 3 個の互いに区別される連珠状、他の 3 例は 2~4 個の大小不同のある脾の集簇形態を呈した。全例で X 線 CT 所見と一致した。以上より、本法は脾の有無を明瞭に表現し、形態異常を指摘しうる非侵襲的診断法であると結論された。

17. モノクローナル抗体 Du-PAN II による脾癌の腫瘍シンチグラフィに関する基礎的研究

中村佳代子 塚谷 泰司 久保 敦司
橋本 省三 (慶應大・放)
古内 孝幸 阿部 令彦 (同・外)
高見 博 (帝京大・外)

脾癌の腫瘍マーカーの一つである Du-PAN II に対するモノクローナル抗体 (IgM, MoAb) を ^{125}I にて標識し (酵素法)、ヒトの脾癌を植えたヌードマウスに投与し、生体内動態を検討した。Du-PAN II を産生しない脾癌には MoAb は取り込まれず、また、Du-PAN II を産生する脾癌、PAN-5-JCK に正常マウスの IgM 抗体は集積しなかった。腫瘍、PAN-5-JCK が小さい (0.2 g) 時、血中の抗原 (Du-PAN II) 量は低く、抗体投与 6 日後に MoAb は腫瘍へ、血液との比 (T/B) が 10.4 に達するほど高く取り込まれていた。腫瘍が大きい (1.8 g) 時、血中抗原量は上昇し、腫瘍への集積は低下 (T/B=2.5) し、肝、脾、腎への非特異的分布が増加した。MoAb を投与した担癌マウスの血清をゲルクロマトグラフィーにて分画した結果、MoAb は分子量の小さい蛋白質に分解していた。血中に抗原が分泌されていると、投与 MoAb は分解して腫瘍への到達が妨げられる可能性があると考えられた。

18. 悪性褐色細胞腫の一例 (シンチグラム所見を中心に)

福永 淳 鍛 喜美恵 篠原 義智
疋田 史典 佐藤 雅史 渡部 英之
山岸 嘉彦 (日医大第二病院・放)
久吉 隆郎 (同・外)
久保 敦司 (慶應大・放)

症例：21 歳女性。会社検診にて胸部多発性結節陰影を指摘される。特に自覚症状は認めない。尿中カテコラミン上昇、血中ノルアドレナリン上昇あり。胸腹部 CT scan、腹部エコーより von Recklinghausen 病に合併した左副腎の悪性褐色細胞腫であり、肝・肺・骨に転移していた。Ga シンチでは原発巣・転移巣ともに集積像は認めなかった。骨シンチでは頸椎・胸椎・腰椎・肋骨・腸骨に集積像がみられ、それらは骨増殖性転移であった。 ^{131}I -MIBG シンチでは原発巣および肝・肺・骨の転移巣に著明な集積像がみられ、SPECT にてその立体像の理解が可能であった。

19. I-131 標識 MIBG シンチグラフィによる褐色細胞腫の診断——摘出標本 Autoradiography の検討——

太田 淑子 牧 正子 日下部きよ子
広江 道昭 近藤 千里 前田 卓郎
吉岡 明子 重田 帝子 (東女医大・放核)

褐色細胞腫にて腫瘍摘出術の施行された 12 症例、14 腫瘍のうち 2 腫瘍は I-131 MIBG シンチグラフィにて描出されなかった。一つは腫瘍全体が壊死に陥っていたが、もう一つの腫瘍に関しては壊死は認められず、I-131 MIBG が集積しなかった原因については解明されていない。この点について手術摘出標本の autoradiography の結果をもとに検討した。方法は手術摘出標本の凍結薄層切片 (40 μm) を X 線 film に密着し autoradiogram を作成した。I-131 MIBG の静注より autoradiogram 作成までの間隔は 6~21 日である。中心に被膜を伴った壊死巣の存在する比較的大きな腫瘍の実質部には均一に MIBG が集積する傾向が認められた。壊死のない小さな腫瘍については限局性に集積の高い部位が散在し、不均一な集積を呈していた。

autoradiography により MIBG が均一に、または不均一に集積する組織、集積しない組織が確認された。